

地域学研究会 第6回大会 報告

日 時 平成27年11月28日（土）
10:00～16:00
場 所 鳥取大学共通教育棟 2 F
A20講義室

1. 開会挨拶・来賓挨拶
2. 鳥取大学地域再生プロジェクトの概要説明
3. パネルディスカッション趣旨説明
4. パネルディスカッション報告（第1報告～第4報告）
5. パネルディスカッション総合討論（要約）
6. 総括
7. 資料

開会挨拶

藤井 正 (地域学研究会会長・鳥取大学地域学部長)

皆様、おはようございます。4月から地域学部長をしております藤井と申します。

きょうはお休みの朝、早くからお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。地域学部も2004年にスタートとし、もう12年目を迎えております。ほかの大学でも地域学部が次々できるという報道が盛んに最近なされておりますが、うちが10年余り前につくり、その後、幾つかほかの国立大学にもできまして、一緒に協議会として意見交換もしてまいりました。決して今の地方創生という最近の波だけに乗ってつくられているものではなくて、地域を重視するという方向への、もっと大きな時代の転換だというふうに我々は考えております。

そうした中で、地域学部の教員によって地域学について様々な視点から議論し、教育研究の企画をする主体として組織している地域学研究会の今年の第6回大会では、地域再生の手法、特に地域と世界をつないでということ企画をいたしました。地域というのはローカルな話で、狭い範囲に収斂していくようなイメージとなりがちです。しかしながら、地域学部をつくったときから、地域というのはそこを起点として世界につながるものであるという、そのような視点を我々は持っておりました。そこが大事なポイントでもあり、新たな展開を支える点でもあると考えてまいりました。今回はそこに焦点を当てて、この大会を企画したということになるわけです。

今日は4名の方にパネリストとしておいでいただきました。今、司会からもお話がありましたように、多方面からその地域のグローバルな展開というものを考えていきたいと思っております。

隠岐の海士町からは、いつも山内町長さんに学部必修の1年生の授業で、過疎の離島でも、とても元気な地域があるということを示すために御講演をいただいて、いつも夏休みには学生たちが実際に海士町を見に行きます。本日おいでの豊田さんにも何回も鳥取大学のほうに来ていただいて、学生主催のワークショップなどの議論の場をつくっていただいております。最近では島前高校のほうで高校のグローバルな展開を図られておまして、きょうはそのあたりから、地域の教育の面におけるグローバルな展開についてお話しいただけると聞いております。

それから、ケイツさんはタイムという、地域の国際的な活動をずっと続けておられまして、地域から直接海外へつながるような動きを展開されてきました。今日は、その辺のお話をいただけるかと思っております。

それから、兵庫県立大の松原先生には、ジオパークという一つの地域の素材、資源を使ってどういうふうにグローバルな展開をしていくかというあたりの話題を提供していただけると聞いております。

もうおひと方、倉吉のバルコスの山本さんは、「倉吉から世界へ」というスローガンで企業活動を展開されています。言うまでもないことですが、企業、経済活動も決して東京経由だけではない、そういった経済の面でのお話もいただけるかと思っております。

こういった各方面から、これからの地域の新しい展開について世界と直接どうつながるのか、それが地域の再生にどういうふうに糧となり、地域の人材養成にいかん反映するかというあたりを、皆様と御一緒に考えることができれば幸いですと思っております。どうぞきょう1日よろしくお願いたします。

来賓挨拶 岡崎隆司（鳥取県地域振興部部長）

皆さん、おはようございます。ただいま御紹介いただきました鳥取県地域振興部の岡崎です。よろしく申し上げます。

本日は、地域学研究会の第6回の大会が、このように多くの皆様方に御参加いただいて開催されますことを、まず心よりお祝いを申し上げます。そして、藤井学部長様をはじめ、教職員の皆様方、関係者の皆様方の御尽力によりまして、鳥取大学、そして地域学部は地域に貢献し得る学生、卒業生を数多く輩出されております。心より感謝と敬意を表する次第であります。

さて、ことし日本はノーベル賞、2人の受賞者を輩出したということで大変沸き返りました。生理学医学賞を受賞されました大村智北里大学特別栄誉教授は、インタビューの中でこのように言っておられました。科学者は人の役に立たなくちゃだめなんだ。人の役に立つことをすることが大事だ。私は人まねはしない。人のまねをしていたらそれで終わり。それより越えることは絶対にない。そして、このようにも言っておられました。成功者は失敗を言わない。1回、2回の失敗なんてどうってことはない、若いうちは。ここにお集まりの半数以上の方が若い方だと思いますし、気持ちは20代の方が全員だというふうには私は思っています。そして、物理学賞を受賞されました梶田隆章東京大学教授もこのように言っておられました。ニュートリノの研究はすぐに役に立つというものではなくて、人類の知の地平線を拡大するようなもので、科学者個人の知的好奇心に基づいて行われている。このお二方のお言葉の中には共通する言葉があります。人の役に立つ、これだと思いません。そして興味深いのは、失敗を恐れないとか、あとまねをしてはいけないとか、あとは知的好奇心、そして私が非常にいい言葉だと思ったのは、知の地平線を拡大するというありそうでなさそうな言葉が、いとも簡単にインタビューの中で言われたというのはすばらしいと思いました。

さて、振り返ってみますと、この地域学ですが、藤井学部長の言葉の中にもありました。既存の学問体系を地域という言葉で再構築して、地域に存在する公共課題の解決を目指していこうということだと伺っております。そして、地域学部は4つのキーワード、環境、文化、教育、そして政策という視点でもって、地域の公共課題を実践的なフィールドワークでもって解決していこうということでもあります。これは足元から、地域から課題解決して行って、それを大きな目で世界へと広げていくということだと思えます。逆に、世界の目で見ても地域の課題を解決していくということだとも思えます。今日は4人のパネリストの方にお越しいただいて、そういう視点の中で、我々鳥取の地域が何がまさっていて何がちょっと不足しているかなど、それを人材育成も含めて勉強していく時間になると私は期待しております。今日を起点にここで議論されたことが地域で豊かな豊かな実を結んで、大きな大きな華やかな花を我々が見られることを期待したいと思います。

最後になりましたが、ここにお集まりの皆様方、そして何よりもこの地域学をこよなく愛する方々の御発展を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉とします。本日はおめでとうございます。ありがとうございました。

鳥取大学地域再生プロジェクトの概要説明
澤田廉路（鳥取大学地域学部特命准教授）

皆さん、おはようございます。今、紹介をいただきました地域再生プロジェクト運営委員の澤田でございます。

この水色のパンフレットをごらんください。地域再生プロジェクトの説明ですけれども、先ほど藤井学部長さんなり、あるいは岡崎部長さんが地域に対する課題をどういふふうに解決したらいいかということをおっしゃいました。そういったことをやるのが地域再生プロジェクトですけれども、表紙をごらんください。3つの円があって真ん中に、地域が持続的で活力がある新たな地域再生モデルを構築するとあります。それを3つの円が支えています。3つの円の1つ目が、実践力のある人材の育成、2つ目が、研究・調査、実践の展開、そして一番下に地域再生ネットワークの構築、この3つの円が、さ



も一つ融合するように真ん中にこの目的、スローガンが書いてあって、これがミソですよ。この3つの柱が融合することによって地域の課題を解決していこうというのが、まさにこの地域再生プロジェクトです。

地域再生プロジェクトは地域学部の先生方が中心になってやっているのですが、中身につきましては、このペーパーが間に入っていると思います。このペーパーに、今申し上げました3つの中の1つ目と2つ目が中心に書かれております。1つ目が、地域再生を担う実践力のある人材の育成ということで、大学院生、学部生を対象にした地域協働教育プログラムの開発、実践、検証ということで、4つの学科の先生方がフィールドワークを中心とした教育プログラムの開発ということで、実際に地域に出かけていってそれを勉強しながら地域の課題を解決していこうと、そういったことをやっています。

1つ目のいろんなフィールドワークとあわせて、2つ目に、自治体職員やNPO関係者等社会人の課題解決力向上のための研修会。これは私が担当しているものですが、県の職員人材開発センターと協力し合って地域のいろんなことをやっている皆さん、そして行政、大学、この3者が一体となって研修をするというプログラムです。これは皆さんに協力いただきながらこの3年間やってきたわけですが、最初の年は1回しかできなかったのですが、去年は3回。ことしは8月11日と10月1日の2回、8月は鳥取市の商店街の中の空き家のプロジェクトということで鳥大サテライトキャンパスSAKAE401を使いまして、今、鳥取市ではリノベーションが非常に活発になされています

れども、その先駆けとなった旧横田医院、あるいは「ことめや」という旧旅館の中の活動等を見ていただきました。併せて、リノベーションでことしはブックカフェホンパコというのができましたけれども、そこで実際頑張っている若者の岡田良寛君にもゲストスピーカーになってもらって、実際地域でやっていることを学生は見て、自治体の職員もそういったところいかに協力し、いかにサポートできるかということを実際にやっているところを見た上で考え、議論を行いました。

ことしは2月の下旬にもう一回、福祉の関係で、2番目に出てくる地域社会の再生ということで地域包括ケアシステムの形成について、竹川先生が鳥取市の用瀬でやっていらっしゃる活動を地域の方と一緒に考えてみようということを今計画しています。詳細ができれば年明けにでも皆さんのほうに御案内できると思いますので、ぜひ関心をお持ちの皆さんには御参加いただきたいと思っています。

今、2番目の話になりましたが、空間の再生については中心市街地の再生ということで野田先生がやっていらっしゃいます。そういったことも今申し上げました研修会等で実施しているということです。

それから行政システムの課題解決の支援ということで、この中に、小野先生は行政評価の専門の先生ですが、1月13日に、これは行政職員が中心になるわけですが、今、地方創生で総合戦略を鳥取県はいち早くまとめました。けれども、まとめただけで終わりでなくそれをいかに進捗していくかということは、行政評価の一つの指標を使って数字であらわせる形で持っていくかといけないうことがありません。そういった説明を小野先生にさせていただきますので、行政職員の方は、ぜひ1月13日、県の職員人材開発センターで開かれますので、御参加をよろしく願います。

それから、4番目に書いてあります地域の価値の評価の発信につきましては、南部町で一式飾りの取り組みの研究をされている高橋先生、あるいは貝殻節の研究の鈴木先生、小玉先生の鳥取砂丘学とか、まさに地域の価値を再認識しながら、それをいかに発信して地域再生の糧にしていくかということの研究されておられます。

それに加えて、この中のペーパーにはないのですが、もう一つ大きな話があります。3つ目です。自治体や民間組織などの地域再生ネットワークの構築、これがこのプロジェクトの最後の仕上げになります。3月上旬を目指してこのネットワークを構築したいと思っています。そういった構築を大きな地域再生の推進のプラットフォームとしてつくっていきたく、ここに御参加の皆さんにもぜひ協力いただきまして、そういった形でしっかりとしたネットワークをつくっていきたくと思っています。

地域再生プログラムの紹介ということでしたけれども、地域再生プロジェクトの推進に、皆さん、どうぞ御協力していただいて、この地域再生プロジェクトが進むだけではなくて、実際に地域が再生するような活動につながっていければと思います。

地域再生プロジェクトの説明と言いつつ最後はお願いになりましたけれども、私のほうからの説明です。どうもありがとうございました。よろしく願います。

パネルディスカッション趣旨説明
仲野 誠（鳥取大学地域学部）

1. パネリスト紹介

パネリストとして次の4名の方をお迎えした。一人目は株式会社バルコス代表取締役の山本敬さん。山本さんは1991年に倉吉にUターンをし、「倉吉から世界へ」をコンセプトとしてバルコスを設立した。自社ブランドを中心に国内外にハンドバッグの拡販を展開している。

二人目は兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科助教の松原典孝さん。専門は地質学で、2010年に兵庫県立大学に着任してからは、山陰海岸ジオパークの資源を地域住民とともに科学的な視点で発掘をし、情報発信とともに積極的に行っている。

三人目はタイム（とっとり国際交流連絡会）会長のケイツ佳寿子さん。ケイツさんは1988年にタイム（とっとり国際交流連絡会）を創立され、その中心的なメンバーとして国際交流、国際理解教育などに長らく活躍してきた。

四人目は隠岐國学習センター・センター長の豊田庄吾さん。豊田様は2009年11月に島根県海士町に移住し、その後、高校連携型公立塾、そして隠岐國学習センターを立ち上げた。2013年より、隠岐島前高校魅力化コーディネーターの委嘱を島根県教育委員会より受け、高校でのグローバルなキャリア教育の授業展開をしている。

2. パネルディスカッションの論理構成

パネルディスカッションの構成は次のとおりであった。1番のバルコスの山本さん、2番の松原さんからは、地域からの発信、あるいは「攻め」、つまり地域から外に向けてどう新しい価値や新しい物語・意味というものを発信していくかという趣旨で話していただいた。3番目のタイムのケイツさんは、国際化、あるいはグローバル化によって足元の風景が確実に変わっていくときに、足元で私たちの暮らしをどう守ったり、あるいはいろいろな人とどうともに生きていくのかというお話をしていただいた。最後に、海士町から来ていただいた豊田さんの話は「グローバル」がキーワードであり、特に隠岐島前高校を事例として、グローバルローカルな人材をいかに育成しているのかというところに眼目をおいた。

3. コーディネータによる問題提起

パネルディスカッションに先立ち、「ローカルとグローバルをめぐる幾つかの論点」というタイトルで仲野が問題提起をした。

3.1 近代の裏切り？

まず「近代の裏切り？」という切り口で、この社会で起きているパラドックスについて考えてみたい。かつて近代という時代は非常に理想的な時代とされたことがあった。例えば、近代化が進めば人間は宗教とか民族とかいうしがらみから自由になって、賢くなるために紛争は起きなくなるとか、あるいは物質的に豊かな社会は人間に幸せをもたらすということが予想された。

しかし、結果的には必ずしもそうはならなくて、物質的に豊かな社会、あるいは資本主義が進むことによって意図しなかった新たな問題が起きてきた。たとえば日本は相対的に幸福度がそれほど高くありません。お金というものは非常に私たちの暮らしを豊かにするものですが、お金を得ることが目的になると手段と目的が逆転してしまって意図せざる生きづらさ（その帰結としての自殺の増加とか）、そういった問題が起きてきた。このようなパラドックスのメカニズムに着目してみたいということである。

3.2 「国際化」と「グローバル化」

「国際化」という言葉が長らく使われてきたが、これまでの国家的課題あるいは行政の課題としての「国際」、あるいは内外人平等の原則を迫及する「内なる国際化」と、現在の日本が直面している「グローバル化」はかなり質が違うのではないと思われる。「国際化」というのは文字どおり「インター・ナショナル」ですから国家間の関係が前提になります。だからプレーヤーは国家なわけである。ところが今のグローバル化、あるいはその動きの中で現れる現象では必ずしも国家が主体ではない。国境を超えているような情報とか人とか企業がかなり自由に行き来している。グローバル化はもはや国家を必ずしも前提にしておらず、今日のお話はむしろ「グローバル」という捉え方のほうがふさわしいのではないだろうか。

そう考えると、今日のグローバルな問題は「近代化論の失敗か？」という疑問が生じる。かつての近代化論でよく議論されたことは、近代化によって官僚制などの合理化が進展したり、分業とか協働体制が発展していく。あるいは属性的身分社会という社会原理から普遍的な業績主義的価値観が広がっていった。要するに近代化すれば社会は豊かになる、争い事はなくなる、人間は幸せになると予想されていた。しかし現実には必ずしもそうはならなくて、例えばエスニック現象、民族紛争や分離独立、あるいはがんばっても報われない貧富格差が目立つ格差社会といわれる現実が観察され始めた。つまり近代化によって人間は本当に賢くなったのか疑問に思われるような現象がどんどんどんどん起きてきたのではないか。

3.3 第1の近代と第2の近代

そんなパラドキシカルな現象を目の前にしているような議論が起きてくるわけだが、たとえばウルリッヒ・ベックというドイツの社会学者が、近代を第1の近代、第2の近代と分類して考えた。例えば、第1の近代と呼ばれるのは、伝統社会が近代化していく過程である。より平易に言えば、物質的に貧しい社会が物質的に豊かになっていく、あるいは農耕社会が工業化していくというような非常に単純な近代化だということだ。ところが、そんな時代はもう終わり、今、私たちが経験している近代は物質的に既に豊かな社会がさらに豊かにならなければならないという第二の近代だという。

資本主義は成長することが大前提で、豊かな社会がもっと豊かにならなければならないという命題が生じる。従来のおりもっと物質的に豊かになる方向性が目指される一方で、豊かさの意味そのものを再定義しよう、書きかえようという方向性も見出されてきている。そもそも地域学というのは従来豊かさを再定義する志に支えられた精神運動だと私は考えるが、どうやって豊かさあるいは豊かな生き方という物語を書きかえられるか、あるいはこれまでの地方と都市の縦の関係、あるいは主従関係を、地方から発信したり、地方が主体を取り戻すことができるのか、ということである。

第2の近代で新しい問題が起きるとベックは議論する。一つはマクロな視点から見るとリスク社会というものが生まれると。もう一つ、個人レベルでは個人化というものが進展するというのである。

まず、1つ目のリスク社会について。これまでは人々の関心は生産したもの＝富をどうやって自分たちがとるか、富の分配あるいは収奪だった。富をめぐる争争が起きたりした。そして、富をいかにやるかということで集団がつくられてきた。ところが第2の近代は排除型社会の様相を呈す

るようになる。そもそもリスクのもとになる、失業、環境リスク、犯罪などを誰に押しつけるかという社会になってきている。リスクがあるとみなされるものをいかに自分の身の回りから遠ざけるかといった排除型社会になってきている。あらゆるリスクを自分で選んだ結果として引き受けなければならないというリスクである。

もう一つ、第2の近代で起きた個人化というのは、それまで自分を守っていた家族、地域、民族、会社というようなこれまで前提とされてきた暮らし方、あるいは個人の単位、集団のつくり方というものがどんどん機能しなくなるということ。安定した単位というものがどんどん切り崩されていくということ。

個人化の進展は従来の標準的なライフコースの持つ拘束力を緩め、個々人はみずからの人生をみずから設計することを強えられるようになる。そのような状況に私たちは追い込まれているということである。

パウマンという社会学者は第1の近代に生きる個人とは巡礼者であったという。大概の人たちは約束されたライフコースがあって、そこを巡礼していった。そうではない人たちもいたのだが、非常に少数であったということである。ところが第2の近代は人々が2つに分かれるという、一つのグループは旅行者、もう一つは放浪者。旅行者というのは自分で資源をもっている。資源を持っているからどこに行くか、何ができるのかということ自分で設計することができる。もう一方の放浪者は資源をもたないので、たまたまたどり着いた場所で糊口をしのご、何とか生きるしかない。人々はこの二つに分かれていく。

資源というものも、従来認識されていた資源だけではなく、これまで気づかなかったけれども、新たな意味がある、価値があるという資源が「発見」されている。これまで地方、あるいは田舎には何があるか、地域資源の発見とは「中心」——東京や大阪から発信されるというものを書きかえていく作業ではないか。あるいはこれまでのように資源がないと諦めるのではなくて、資源を新しくつくっていく、あるいは物語を新しくつくっていくということではないか。

3.4 この時代背景の再考

そのように、いま一度、私たちが生きているこの時代背景を少し理解するヒントになれば幸いに思う。そこで「グローバル」という言葉が意味をもつのではないだろうか。グローバルな課題とは別にローカルな課題があるということではない。グローバルな課題とローカルな課題というのはコインの裏表であり、自分の足元で起きていることはグローバルな動きの帰結であって、そして自分たちの足元での活動がまたグローバルにも影響を与えていくという、いわゆる弁証法的な、相互に関連し合う動きだろうと思う。

そう考えると、グローバルという言葉は一つの現実を捉える言葉であると同時に、思考の方法もある。物事をどう捉えるのか、今の世界をどう捉えるのかということでグローバルという言葉を使うと、ある問題を国家の枠組みから解放して、あるいは地域の枠組みから解放して、外とのつながり、関係性の中で捉え返すといったことだと思ふ。平たく言えば、鳥取のことは鳥取だけ見てもわからないということかもしれない。自分の足元は自分の足元だけを見てもわからないということ。外とどうつながっているのか、あるいは外からどう私たちの暮らしが変えられているのか、あるいは変えられてはいけないとしたらどうやってそれに抵抗するのか、世界を変えるという発想と同時に世界に自分たちが変えられないという発想の重要性、自分たちを守っていくか、あるいは新しい価値を創造していくことができるのかといったことであろう。だから、欧米の事例を普

遍化してそれをもとにほかの地域を分析するという方法がもはやとり得なくなっているのだろうと思う。

私たちが生きてくこの足元が外の世界とどうつながって、そしてコインの裏表として同時進行しながら自分たちの、私たちの個々の風景が変わっていくのかということを念頭に置きながら、名の方の非常に固有の豊かな御経験、格闘の話をお伺いできたらと思う。

【第1報告】
「人口減少時代に豊かな鳥取県をつくるために」
山本 敬（株式会社バルコス）

皆様、株式会社バルコスの代表取締役、山本敬でございます。今日はよろしくお願ひいたします。

僕は、自分がやっていることをグローバルというのだったらそうなのかなと思って、先ほど仲野先生のお話を聞きながらずっと考えておりました。今日の日本海新聞を読んでみたら、鳥取県は人口が57万人を切っていくということが書いてありました。その中で、鳥取県はもっともっと豊かになっていかなければいけないと個人的には考えています。豊かなところで暮らしていきたいし、豊かな人生を送りたい、そういう思いでやってきたのは事実ですので、そこに今一番興味があるかなと思います。そこら辺を弊社の事例を含めながら考えていけたらと思っております。よろしくお願ひいたします。



まず、今、うちが何をやっているかということですが、基本的には、かばん・ハンドバッグ・財布なんかを作っております。どういう仕組みでやっているかという、バルコスイタリーというのはイタリアのフィレンツェにあります。弊社は、鳥取県倉吉にあるのですけれども、その倉吉に情報だけを入れていきます。それで、実態の生産は中国の広州で、自社でやっている分はサンプルだけを作っております。簡単に言うと、原型となるサンプルだけを自社の、それも広州のサンプル工場で作っているというのが今の弊社の実情です。

それで、実際の生産はどうしているかということになりますが、実際の生産は最適地をその中から選ぶようにしております。今、実際にうちが使う一番大きい生産背景は中国なのですが、例えば伊勢丹さんみたいに比較的高付加価値を必要とされる場所は、サンプル自体は中国で作るのですが、メイド・イン・イタリーで売りたいので、僕らがいうバルクという本生産に関しては、例えばイタリアの工場で作りたいとか。例えばヨーカドーさんみたいにもっと安く、もっと大量にという場合は、例えば今だとベトナムとかバングラデシュを使います。

僕は、日本の技術が素晴らしいとか日本の生産が素晴らしいというのは、現実的にはちょっと無理があるかなと思っています。僕らの業界に限っていうと、実際にハンドバッグとか財布で日本人

の職人さんがトップクラスだった時代があります。けれど今は、中国人が圧倒的に上手です。これはもう完全に下請の歴史なのですね、バルクと言われるものに関しては。日本という良さはあるのですが、ただ、本当の日本のよさを出していかなければいけない。

バルコス生産機能



クイックに高品質の商品供給が可能

僕は、今、世界で一番ヒットしたプロダクトというと、多分 iPhone だと思います。ここ 10 年間で一番ヒットしたアイテムというとアップル社の商品ですけれども、あれも基本的には全て中国製です。でも、これこそがアメリカという背景がある。考え方もアメリカっぽい。IT というのは、僕は基本的にはやっぱりアメリカの考え方だと思っているのですが、それが集約されているものが、ただ単にメイド・イン・チャイナで作られているというだけの話かなと思います。日本もそういう

形にしていかなければいけないだろうと思っていて、うちは本生産には実は余りこだわっていません。

例えばプラダというバッグありますが、あれはもうほとんど中国で作られているわけです。でもイタリアという国は、非常にうまく出来ていて、付加価値というのはどこにあるかよくわかっているわけです。最終出荷地がイタリアだと、ほとんどメイド・イン・イタリアとつけられるわけです。なぜ、メイド・イン・イタリアがいいかというと、みんながメイド・イン・イタリアのほうがいいからですね。ただ単にそれだけの話で、経済というのはもう非常にシンプルに出来ているなど僕は思っています。やっぱりこのことを認識していく必要があるのかなと思っています。

昭和58年	創業
平成3年5月	有限会社バルコス設立
平成8年8月	株式会社へ組織変更
平成9年	ドイツ・PICARD日本総代理店契約
平成11年8月	東京支店開設
平成15年	オリジナルブランド「comoratti」販売開始
平成16年1月	オリジナルブランド「CO JEENE」販売
平成18年8月	人販支店開設
平成19年1月	本社事務所移転（倉吉市巾江）
	イタリア事務所開設
平成19年2月	オリジナルブランド「Hanaa-fu」奇蹟半端
平成19年9月	第92回国際皮革製品見本市「MIPEL」初出席
平成19年11月	鳥取県経営革新大賞「市場開拓賞」受賞
平成20年5月	中国地域ニュービジネス大賞「優秀賞」受賞
平成20年7月	BARCOS HONGKONG LIMITED設立
平成20年9月	第94回MIPELにて「デザインイメージ賞」
	上位6社にノミネート
平成21年6月	中国・広州に広州巴可新皮具貿易有限公司設立
平成21年10月	ハイ・サービス日本300選受賞
平成23年9月	第100回MIPELにて MIPEL AWARD受賞 「コミュニケーション・アクティビティ」部門
平成25年3月	第103回MIPELにて Hanaa-fuがPANORAMA賞受賞
平成27年2月	2014年表参道てなしセレクション「Hanaa-fu」受賞

今説明しました仕組みを使って弊社はサンプルだけを作って、ただ、今日本一のサンプル数を作っています。大体、月 500 個のサンプルを作れる設備を持っています。うちはもうサンプルを先に作って、オーダーを受けますか、受けませんかということをやっているだけなのです。それで、お客さんによって生産をいろんなところに変えています。

右が簡単な年表ですが、平成 21 年にこの仕組みが非常に評価されて、経済産業省の外郭団体のサービス産業生産性協議会が選定されているハイ・サービス日本 300 選というのを受賞しております。これは鳥取県の民間企業では初めて頂きました。あと、さっきの方法を使ってどんどんや

って、海外には平成 19 年辺りから出ているのですが、平成 20 年のミペルというのはミラノの一番大きいバッグの展示会で初めてデザイン賞に入賞、ノミネートされまして、第 100 回のミペルで最優秀賞を頂いております。

では、これを使って、今、実際どんな感じかという、弊社は倉吉が本社です。全てのソフトは、倉吉にあります。今、例えば東京で育って東京の大学を出てうちに来られる方も結構いらっしゃって、特にデザインを志すような方は非常にいい人材があります。それで、実際にどうやっているかという、発信基地はイタリアのミラノとアメリカのニューヨークです。

ここの2つのショールームと契約して、ここから世界に物を売っていただいています。

それで、ここから発信して、ではどういうことが起きるかという、今はアジア中心なのです。物を欲しがるのはもう完全にアジアの方です。欧米の方、日本人の方もそうですが、僕らの世代より今の若い人は明らかに

オリジナルブランド「Hanaa-fu」海外展開



米 ニューヨーク、伊ミラノショールームから世界に発信

海外店舗展開



香港そごう百貨店



Lotte百貨店 Myungdong店



新世界百貨店江南店



Lotte百貨店 Bundang店



Robinsons



Coinミラノ店

物を欲しがらない。それでどうするかというと、アジアの先進地、ソウル・香港・シンガポール・マカオの辺から始まって、来年あたりからどんどん中国のメインランドに出店します。この11月にはインドネシアのジャカルタにコーナーをオープンします。

アジアの人たちは、価値観がどんどん変わって来ています。その価値観は、日本人の今の持っている価値観よりちょっと遅れているのです。シンガポールの人はかなり豊かなのですが、どちらかというと日本人の方のほうが精神的にはまだ豊かだと思っています。取り巻く東南アジアの方々ももっと貧しい。もっと貧しいのですがもっと欲しがります。物を持つことが豊かさの象徴みたいになって、欲しい、欲しい、欲しい。すごいですよ、買うパワーが違います。

これは、今一番気をつけてやっていることですが、うちはもう海外は折り紙バッグだけをやっています。変形するバッグです。どこに行っても、これはもうバルコスのHanaa-fuだとわかるように演出しています。これが今の海外での活動です。

日本は逆にいろんなことをやっております、百貨店に出店したり、通販とか、OEMもやっています。ここら辺は本当に食べるためにいろんなことをやっていて、海外のほうが商売の理想としてはやっぱり近いかなと思っております。

国内展開

<百貨店事業>



伊勢丹新宿百貨店



大坂LUCUA1100



東急東横百貨店



京王新宿百貨店

<OEM・通販事業>

大手アパレルメーカー、有名セレクトショップ向け商品共有のほか、テレビや雑誌を使った通信販売も堅調。



ここからが大事な話で、僕はなぜこんなことをやっているかということ、ほとんど好奇心だったのです。もともと僕は大阪生まれですが、中学、高校が倉吉で、大学は東京へ行きまして、それで東京でカメラマンをして働いていたのですが、当時、雑誌というのは今のインターネットみたいなものだったのです。そこで、付加価値というのをすごく勉強させて頂いて、その中で思っていたのは、ずっと高付加価値のローテックということでした。だからハンドバッグをやったのですけれども。

この仕事をし出して一番感じているのは、ヨーロッパに行く機会があって、ヨーロッパの田舎はすごく豊かだなと感じていまして、何で田舎なのにこんな違うのだろうと。特にフランス、イタリアですが、例えばフィレンツェで誰が一番お金を持っていらっしゃるかというと、農業をやっている方が一番お金を持っているのです。あそこはトスカーナなのでキャンティワインです。キャンティワインをやっている人が一番お金を持っている。そのあとがファッション。グッチの本社がありプラダの本社がある。僕はここしかないと個人的に思っています。

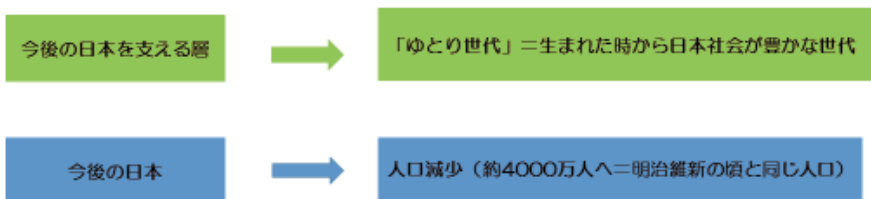
フランス、イタリアと日本。この2つの国を比べてみると、日本は貿易収支であまり勝ったことがないのです。なぜかといったら、もう圧倒的に食べ物と観光とファッションで負けているのです、ローテクの。トヨタとか日産で負けているわけではないのです。

ちなみにハンドバッグだけで、イタリアで去年どれくらい負けているかという、貿易収支で1,000億負けているのです。ハンドバッグ単品で。これが服になってきたらこれが何千億になってくるわけです。それを車で取り返そうと思ったらすごく設備投資がいるのです。逆に、フランス、イタリアが得意としているのはまず農業です。逆に言ったら、ここしかないと思っています。

今、一瞬だと思うのですが、多分アジアの国から日本は完全に憧れられていますから、一瞬すごいチャンスが来ると思います。ただ、皆さんも御存じのとおり、既にもうGDPなんかでいうと完全にシンガポールのほうが日本より高いわけです。しかし、成熟度としては、やっぱり日本のほうが高いと思っています、それを今後アジアの国に売っていかなければいけないのかなと思っています。

そこで今日のメインの話ですけれども、僕、実は、何だろうとされていて、成熟社会に生まれた若者がつくる社会と書いているのですが、僕らの頃は、まだ高度成長期でした。今の子はバブルを知らないと言うのです。ちょうど今うちに入ってこられるぐらいの方を見て思うのは、初めて欧米人みたいな日本人が来てきたと思っているのです。どういうことかと言うと、生まれてからこの方ずっと安定しているのです。僕らのときはバブルだと言われていましたが、実際どんな生活をしているか、僕は大学が東京だったのですが、クラスの中の半分はうちに風呂がないのです。エアコンなんか持っている人はほとんどいません。でもバブルなのです。右肩上がりに伸びているのですね。豊かだったのです。今の子は、基本的にうちに風呂がない子なんてまずいないですよ、ひとり暮らしで。それにエアコンがない子なんていないですね。逆に言うと、安定しているこういう世の中に生まれてきたということだと思います。

成熟社会に生まれた若者が作る社会



- ①文化＝豊かな社会から生み出されるもの。
- ②高付加価値産業＝人口の増減に影響を受けない産業。
- ③鳥取はそもそもの人口が少ないため、人口減少の影響が少ないといえる。

⇒鳥取は高付加価値産業の創出に適した町である。

豊かな日本で育った、文化を知る「ゆとり世代」とよばれる若者を中心に、鳥取を「マーケット型地域」（＝豊かな人が外（国内外）より、観光・食・文化を目的に来る町）へと変化させていくことで、鳥取は現在のフランス・イタリアの田舎の様な、真に豊かな地域となりうる。

この世代でないと、逆に言うと、ヨーロッパ型の価値というのは実は作れないのではないかと懸念

っていまして。僕はやっぱりだめなのです、基本的にどっちかと言ったら右肩上がり思考なのです。ちょっと浅ましいというか。今の子どもたちは全然違うのです、感じが。こういう世代でないと、例えばフランスとかイタリアが作ってきたような本当に高い付加価値というのは作れないと思っています。これがすごくチャンスかなと思っています。今の若い人たちがそこにちゃんと気づいてそれをやるといいと思います。

それで、今後の日本はどうなるかという、人口が減少して行きます。2100年に4,000万人と言われる。いろんなシンクタンクで聞いて、まず間違いないと思います。ただ、これはそんなに心配することはないと思っています、実は4,000万人というのは明治維新のころと一緒なのです。明治維新のころも鳥取藩はちゃんとあったわけだし、長州藩もあった。ただ、そこの中で一番大事なのは、やっぱり豊かな田舎になっていかなければいけないと思っているのです。それを作るのはやっぱりこの世代だと思っています。今後何が一番大切になっていくかという、世界マーケットを見据えた高付加価値ブランドの創出が出来る人材を地方から輩出出来ないのだめだと思っています。そのためには何が一番重要かという、基本はやっぱり教育だと思うわけです。

僕は前から思っているのですが、自分が高校時代のときはもう本当、ろくに勉強もせずよくこんなことを言うわと自分で思うのですが、これから例えば鳥取県出身の一番優秀な子はやっぱり鳥取大学に入るべきだと思うのです。例えば昔の藩校がそうではないですか。人口減少になっていっても、日本全体はそんなに困らないと思っています、なぜかという外人が入ってきますから。イメージでいうと2100年頃に8,000万ぐらいになるのかなという感じがして、2人に1人が外国人みたいな感じになるのかな。ただ、日本人がやっぱり付加価値を作っていかなければいけないわけです。乗っ取られるとだめなわけですから。そこをやるのは、例えば東大という感じのイメージではなくて、本当に高校の成績優秀者は鳥取大学に入ると、もうその地域で一番の子は絶対鳥大に入ると。でもやっぱり僕も親ですから、自分の子が東大に入れるなら、やっぱり東大へ行かせたいではないですか、もう人情ですよ。

それでは、どうやって払拭していくかということですが、多分その先のような気がしていて、鳥取大学に入学して本当にもう一回そこで優秀であれば、その先は、例えばハーバードとかオックスフォードとかそういうところの大学院に行けるような仕組みがあれば、結構鳥取大学に来るような気がします。ただ、どっちにしても高付加価値を生み出せる人材を輩出出来るかどうかが一番重要なところは、そこで大切なのはアイデンティティーのような気がしています。

では、アイデンティティーとは何かといったら郷土愛なのです。それで、人口が少なくなる鳥取県生まれの血とかそういうものを、もっと大切にしていかなければいけない。明治初期のああいう革命が起きたのはなぜかという、やっぱりそういうのかしっかりしていたからだと思うのです。それが全て肯定ではないのですが、鳥取県を愛して鳥取県の一番優秀な子は当然のように鳥大に行くという世の中になると、僕はもう社会の感じが全然変わってくるのではないかなと思っています。

今日僕がお話しさせて頂いたのは、やっぱり鳥大の卒業生が欲しいのです。うちも何人か来て頂いているのですが、非常に優秀だと思っています。うちは特に県外からの応募が多くて県外の子がいるのですが、うちも鳥取県の企業として生きていく以上、郷土愛を持っている子が欲しい。そういう子に入ってきて頂きたい。そういうことが重要なかなと思っています。人口減少の時代に豊かな鳥取県をつくるためには、ここが一番重要なかなと思っています。そのベースになるのがアイデンティティー。簡単に言うと、好きとか住みたいとか、ずっとここで豊かに暮らしていきたいという

思いではないのかなと、豊かな地域、地元をつくっていききたいという志みたいなものではないかと思っております。

では、これで終了させて頂きたいと思います。ありがとうございました。

【第2報告】

「ヨーロッパにおけるジオパーク活動と山陰海岸ジオパークの取り組み」

松原典孝（兵庫県立大学大学院）

【ジオパークとは何か？】

地域の特性というのは、大地に関わる地球科学的、生物学的、社会科学的な要素と、これらが相互作用を起こして作られています。それらを保全しながら活用するのがジオパークで、持続的な地域を構築していくことがジオパークの理念になっています。さらに、各ジオパークで色々と試行錯誤しており、その結果生まれた知識と経験をネットワークで共有することが大切で、日本も含め、世界中で完成したジオパークはなく、社会の状況に合わせて常に変化し続けているというのもジオパークの理念になっています。

その中で、自然遺産や文化遺産の価値化やジオサイトと言われる地域の大切なものの認識と評価、それらの保全をしています。ジオパークは、ある一定の面積を持ったエリアなので、その地域全体のマネジメントを行う必要があります。ツーリズムや教育活動を推進し、さらに持続的な地域経済を実現させるために地域の商業活動のサポートを行ったり、モニタリングを実施したりしながら、国際的な協力を行うということをやっています。

世界ジオパークが、2015年11月に世界遺産やエコパークのようなユネスコの正式プログラムになり、現在、120のジオパークが存在しています。世界ジオパークのほかに日本独自の日本ジオパークがあり、39地域存在しています。ジオパークになるためには日本ジオパーク委員会の審査を受けて合格しなければなりません。さらに、日本ジオパークから世界ジオパークになるための審査を受けて、合格すると最終的に世界ジオパークになれますが、なった後も4年ごとに審査を受けて、不合格になるとジオパークへの加盟が取り消されてしまう厳しいシステムになっています。

【山陰海岸ジオパークについて】

山陰海岸ジオパークは、鳥取県、兵庫県、京都府の日本海側に位置し、東西が120kmという大きなジオパークになっています。主な観光資源として山陰海岸国立公園、鳥取砂丘などの国の名勝、天然記念物があります。世界ジオパークでは世界的な価値のある地球科学的なサイトの存在が重要なのですが、豊岡市にある玄武洞が、地球磁気（地球のN極とS極）が逆転することが発見された場所として国際的な価値が認められています。あと温泉地、観光地（スキー、



スノーシューウォーク, カニ, 登山, 滝, 海水浴, シュノーケリング, カヌーなど), ローカルフードや地場産品などが山陰海岸ジオパークの売りになっています。

山陰海岸ジオパークのメインテーマは, 地球科学的な大きな出来事である日本海形成に伴って多様な地形, 地質, そして風土が生まれて, そこに人々が暮らしているというものです。日本海形成の歴史の中で生まれてきた多様な資源 (海産物や観光地, 風景, お酒など) をテーマにストーリーを展開しています。

このような地域の資源を保護, 保全, そしてそれらの研究を行って, 教育や学習, 観光開発, 商品開発に活用するというものを民官学が連携して実施しています。研究については兵庫県立大学だけではなく, 鳥取大学の教員とも一緒に研究や活用につながるような全体のことをやっています。

【ヨーロッパのジオパーク①: フルカナイフェルジオパーク (ドイツ) の例】

ここからヨーロッパの (ジオパークの) 例を紹介します。去年, 私はドイツのフルカナイフェルジオパークというところに審査員として行きましたので, その時の様子を中心に, 具体例をお話します。

フルカナイフェルジオパークは, ドイツの西端の方に位置し, (世界ジオパークができた) 最初の年に世界ジオパークになりました。ここの国際的価値はマールという火山の火口です。地下深くでマグマが水に接触してマグマ水蒸気爆発というすごい爆発を起こして, 大きい穴があき, この穴に水がたまっているのがマールです。フルカナイフェルジオパークに行くと, パンフレットにはマールができたかということが書かれています。この地でマールの地球科学的な研究がなされ, 全世界の科学的な共通用語としてマールというものが認識されたので国際的価値が認められています。

ここの地場産品として有名なものが, 炭酸水です。町の中に泉に火山のおかげで地下から炭酸水が湧いてきて, それが大きな地場産品になっています。町の中には (炭酸水に関する) 大きな工場が複数あって, 地域の人の雇用の場になっています。

各エリア内にある民宿やホテルに必ず置いてあるガイドブックには1ページごとにガイドさんの紹介 (ガイドの得意分野など) が書いてあります。地球科学の説明だけでなく, マールや火口湖, 湖には水辺があるので, たくさん鳥たちが来るといった話をしています。他にもトレイルを整備し, GPS やタブレットを使って回ったり, 説明や移動時間の情報が書かれた看板があったり, スポンサーがついていて看板にはスポンサーのマークが入れることで, トレイルを活用しています。さらに, ヨーロッパのジオパークはアクティビティーに力を入れていて, サイクリングの場合, ルートだけではなく, コースのアップダウンまで示して, こうやって回るとこういうのが見えますよといったものを用意しています。

運営について, ここは州立公園であり, 州立公園の事務所の中にジオパークの事務所があって, 地質学専門のディレクターがいます。スタッフとしては5名ぐらい, 専属のスタッフは3名でやっています。ジオパークは地球科学的に重要である場所として指定されているという背景もあり, 学術的な研究も進めなければいけないので, 審査の場では, 論文の出版というのも見えています。

現地審査では, 地域住民との協働を非常に重視していました。例えば, ジオパークになったのを期に, 自分で子供たち相手の教育プログラム, 自然学校みたいなのを始めて, 小屋を住民と一緒に建てて色々な教育プログラムや, 地域の歴史好きな方に協力してもらって, 看板をつくって, 自らガイドをし, 担い手として積極参加をする男性がいます。

また, ジオトレイルの整備では, この州立公園, ジオパークの事務局はお金がないということで

なかなか整備に手が回らないので、住民に半分お金を出してもらったり、住民負担で農家を改装した博物館を作ったりということもやっています。例えば、住民が生物学者等と相談しながら重機を使って草原化した火口湖の池を復活させ、湖にしたほうが景観もよくなり、周辺をトレイルとして整備しました。乱開発のように思いますが、生物学者たちは生物多様性の向上につながったとして逆に評価しています。このように他分野の研究者も協働しながら住民と一緒に地域の魅力アップに努めています。あと、一般の人にわかりやすい科学的な説明が書かれてある看板を色んなところに立てています。これを立てたことによって、観光客が読むだけでなく、これを読んだ住民が自分の土地はこんなにすごいところだったのだと再認識して、積極参加につながっています。ヤギの乳からチーズをつくっている農場の人がこれを見て、この土地はこんなにすごいのだということを理解して、ジオパークのガイドを自分でやり始め、そんなにすごいものだったら、ジオプロダクトとしてチーズなどをジオパークの商品として売り出しています。

<省略>

また、住民がわからないようなあえて難しい看板を立てています。ここは大学の授業などに使われている場所なので、海外の有名な大学の学生がここに研究に来ます。そうすると住民は、「何か難しいこと書いてあるが、すごい大学の学生が来ているからここはきっとすごいんじゃないか」といった話になって、誇りになっているという例もあります。

地元の小・中学校では当たり前前の地域資源を価値あるものと再認識してもらって、自ら守り後世に伝える担い手になってもらうために子供たちへの教育も熱心にやっています。こちらのジオパークでも郷土愛を育てることによって、地域の担い手になってもらおうということを積極的に進めています。

<省略>

ディレクターさんに、地域住民と協働をうまく進めるためのコツは何かと聞いたら、「一緒にコーヒー飲んで一緒に酒を飲んでお話することだ」、「こつこつシステムティックにやっているというよりは、人間関係で頑張っている」と言っていました。ただし、課題としては、地域のメイヤーがどんどん替わって、メイヤーが替わるたびにその人との人間関係をつくり直さなければいけないので、それがすごく大変だとおっしゃっていました。

【ヨーロッパのジオパーク②：レスボスジオパーク（ギリシャ）の例】

山陰海岸ジオパークと姉妹提携しているギリシャのレスボスジオパークは、エーゲ大学と博物館が主体となって、地域の色々な団体と連携をとりながらジオパークを運営し、色々な教育プログラムを作ったり、売りになっている珪化木、木の化石を保全したり、それを見せたりしています。地球科学的なものだけではなくて考古学的なサイトと連携し、新たな試みとしてボートツアーで化石の発掘に行くものがあります。山陰海岸松島遊覧さん等が船を活用しているのを見て、これおもしろいと思って向こうでも始めたそうです。しかし、実際は住民参加、そして地域全体でのジオパーク活動の取り組みで問題があります。大学と博物館が中心になってやっているのですが、お金がないのです。科研費のようなものを使って看板を作ったりしているのですが、レスボス県の知事さんとお話をして、ジオパークに理解を示してもらおう努力をしています。

ボトムアップの作戦としては、地域のアクティビティと連携することです。ダイビングショップの方と連携して、海の中で地球科学的な見どころを見られる面白いコースを作ることもやっています。また、無形文化遺産としての技術や文化の伝承として地場産品の販売なども行っています。

ヨーロッパのジオパークで重視していることは、正しく評価された科学的な重要性、そして正しく理解しやすい科学的解説があり、さらに重要なのがジオパークの担い手としての住民の参加や、旅行商品としての見せ方、アクティビティと連携させること、持続的な運営として運営資金と活動計画のようなものです。

【日本のジオパークの取り組み：山陰海岸ジオパークの例】

日本では、ジオパークになったけれども、交流人口が増えない、ジオツアーを旅行代理店に売り込んだらツアーにならないと断られた、解説看板をどう作ればいいのかわからない、専門家に解説看板の文書作成を依頼したら難し過ぎて困った、といったことが聞かれます。

山陰海岸ジオパークでは、地域の物語を作って、それを住民が認識して、自ら活動して、観光客のニーズとマッチさせるということをやりたいと思っていて、ジオストーリーとしては、例えば、開いてできた日本海というのは海底地形が複雑で深いところ浅いところが入りまじっているの、割と狭い範囲で深いところと浅いところの海の幸がとれ、さらに中国山地に花崗岩という岩があって、その岩が風化すると砂になって、それが流れ込んで鳥取砂丘のような砂丘を作り、砂丘地は根菜にいいとか、メロンを育てたりサツマイモを育てたりラッキョウを育てるのにいい、といったストーリーがあり、こういう大地と人々の暮らしのつながりをストーリーとして強調しています。しかし、それだけではなくて、住民の参加が重要です。

住民の参加の一つの試みとして、住民参加型モデルコースづくりというのをやっています、何のプランも用意しないで現地に行って「どうしましょうか」と相談します。そうすると大体地元の人はいきまします。「おまえ何も考えないで来たのか」と言われるのですが、「はい、済みません」と言うと、色々教えてくれて、地域に何があるかワークショップで探して、フィールドも一緒に調査して、ジオのネタは後でつけます。ジオのネタとして、例えば鹿野の町だったら快適に暮らせる鹿野の大地、洪水にも遭わないし地震にも強い。なぜかといったらこういう地球科学的な理由があるからだよとか、鹿野の町はこういう不思議な地形をしているがなぜかといったら、昔の川の流れが変わったからだよとか、そういった話をくっつけて、マップを作りました (<http://sanin-geo.jp/modules/geopark/index.php/mr.html#sikano>)。これによってジオストーリー、大地に根差す地域特有の性質とその上に成り立つ歴史、文化、人々の暮らしが住民と共有でき、この地域特性の見える化と理解ができました。これができたことによって地域に負担をかけない持続的な活用、保全につながるということが期待できるのではないかと考えています。

この住民による地域資源の再認識の効果ですけれども、ジオパークになっただけでは、全体的には余り変わりません。しかし、竹野のジオカヌーを見ると一気に上がっています。今年で6,000人ぐらいと言いましたかね、1人6,000円ぐらい取っていますので、6,000円掛ける6,000人だと結構な金額になります。これはどういうことかという、山陰海岸ジオパークに滞在した観光客にアンケートをした結果、期待しているもの第1位は美しい風景でした。ただし、それがみんな当たり前と思っていて、余り活用してなかったのです。ジオパークになったのをきっかけにその価値を再認識して、カヌーや海上タクシーで見ることができるツールを提供したので、これが観光客のニーズにマッチしているのではないかと考えます。さらに、ビジネスに取れ入れたいといった活動もあります。

【ヨーロッパと日本のジオパークの共通点】

山陰海岸ジオパークの運営を通じて必要と感じたものは、正しく評価された科学的な重要性、正しく理解しやすい科学的解説、そしてジオパークの担い手としての住民の参加、旅行商品としての見せ方、持続的運営ということで、基本的にヨーロッパと同じです。実際に山陰海岸ジオパークで運営している苦勞していると、結果、ヨーロッパで苦勞してやろうとしていることと同じだったということに気づいたというのが私の結論で、ヨーロッパ、そして日本も含めて、世界中と連携しながら地域の課題に当たっていきたくて考えています。

【第3報告】

「私たちの国際交流—タイム27年の歩み」 ケイツ佳寿子（タイム [とっとり国際交流連絡会]）

私は、三重県で生まれて神戸で育ちましたが、夫が鳥取で仕事をする事になり、鳥取に来ました。それから30年近くたちます。本日は、私たちの民間の国際交流団体タイムについてお話しさせていただきたいと思います。私たちの団体はT I M Eという名前ですが、この由来は、T、鳥取(Tottori)、I、インターナショナル(International)、M、マルチカルチャー(Multiculture)、E、エクスチェンジ(Exchange)、つまり、とっとり国際交流連絡会というのを短くした名前です。



タイムがどういうふうにできたかという説明の前に、まず1988年当時はどういう状況をお話します。88年のデータはなかったのですが、1989年のデータを調べてみましたところ、鳥取県の外国人の数が2,334人で、留学生の数ははっきりわかりませんが、40人程度だったと思います。去年、鳥取県の外国人数は3,797人、留学生は180人です。また鳥取県の在鳥外国人ですが、89年当時はいわゆる在日朝鮮、韓国の方々ももっと多かったと思います。その後で帰化された方も多いため、その内訳はかなり変わってきていると思います。

そのころ、外国人への公的支援という特別な機関はありませんでした。また今ではいろんな各自治体に国際交流会があるのですが、そういうものもありませんでした。ですので、人数も少なく、地元の人々にとっては外国人という、つい見てしまったり、とても珍しいという好奇心のため、悪意味はないですけども、ついつい注目してしまう、そういう存在だったように思います。

当時から国際交流団体はありました。いわゆる民間というのもありましたし、民間なので、いろいろな性格のものがありました。このお話をするに当たりまして、いろんな方にお話を聞いてきたのですが、その当時は、鳥取県で国際交流というとネパールがまず一番初めに浮かんだということでした。日本ネパール友好協会という団体がありまして、岩村昇先生というお医者さんがその頃ネパールでずっと奉仕活動しておられました。私が神戸で仕事をしていたときに、岩村先生が大きな国際的な賞をもらったのですが、そのときの資料を訳したことがありました。

当時私は鳥取とは全く何の関係もなかったのですが、後で聞いてみると、岩村先生が鳥取の御出身だったということで、昔は学校で国際交流というと、ネパールの人たちのために古い切手、使用済みの切手を集めるような、そういう活動をたくさんしたものだ、この間お伺いしました。

それから、ほかには日中友好協会がありました。日中の国交回復に活躍された古井喜実さんが鳥取の御出身だという関係もあってかなり政治的なグループだったようです。それに対して、日韓親善協会というのもありました。今は鳥取の東、中、西部にあるそうですが、当時は西部にだけあったそうです。これはビジネスマン、経済界とのつながりがあったそうです。それから、鳥取県関係で鳥取ブラジル会というのがありました。これは、ブラジルの鳥取県人会とのつながりが強いものでした。その他、当時はソ連があった時でしたから、日ソ親善協会があり、これは主に社会党が関係したものだらしいです。鳥取県の勤労青年が派遣されて、それから帰ってきた方々の会としてとっとり青友会がありました。また、日台親善協会、日本と台湾との協会があり、これは果実連、果物を売りたいという方々がつくっていらしたとお伺いしました。これらからわかりますように、さほど、一般的な国際交流の会というのはなかったような状況だったと思います。

でも地元ニーズがなかったわけではなく、少ないとはいえ外国人はいましたし、だんだんふえている状況でした。ですので、在住外国人の立場からすると、本当に日常生活に困ることはありました。例えば留学生だと、保証人になるとか、お布団のお世話をするとか、病気になったら世話をするとか、受け入れる先生方などが個人的に面倒を見られることが多かったと思います。

また、日本人と友達になりたい、せっかく日本に来たから日本人と知り合いになりたいという心も大きかったと思います。一方、鳥取の方々も、やはり国際理解に関する関心もふえてきた時代です。外国人がいるならお友達になりたい、どこから来たのかなど、そういう気持ちも大きかったと思います。

いろんな理由があったのですが、こうした背景もあり、せっかくいろいろな興味のある個人もいるし、団体もあるので、私たちが何かをするということではなくて、みんなで何かをするために連絡役ができればいいなと思いました。そして立ち上げたのがタイムです。

ちょうどそのころ、留学生に関する出来事もありました。例えばとても背の高い黒人の方がおられました。黒いということや背が高いということで、その方はそれだけで見られるわけです。また言葉の問題とかいろいろなストレスがあったと思うのですが、ちょっと精神的に問題が生じ、御近所の道祖神とか大学の中の銅像とか、そういうものを壊してしまったということがありました。また、自殺した人もいました。とにかく個人が留学生を含め、外国の方を支援している状態だったので、これは余りよくないのではないかという気持ちもありました。また、やっぱりせっかく来てくださっているんだから私たちが皆さんから学びたいし、もう少し効率よく交流ができればいいという気持ちで始めた会です。

鳥取に百村先生もいらっしゃいます。この方は眼科のお医者さんで、タイの難民キャンプで医療活動をされたり、また、眼科医がない南太平洋のバヌアツという国に毎年お通いになって、長年活躍をされた方です。その方がタイムのできる1年前に国際交流サロンというものをつくられました。それはいろんな方に話を聞きましょうという会だったらしいのですが、そのときにいろいろな団体を回られて、ネットワークをつくらうとなさったらしいです。この前お話を伺いましたが、そのときに鳥取県にも行ったのだけれども、全く関心を示されなかったそうです。当時関係部署といっても、パスポートを発行するのが関係部署だったらしいのです。そこに行ったら、公的な機関だから、そんな民間のことにはかかわれないし、個人として行くことはできるけれども、名前を書く

ことはできない、こっそりとなら参加できるというふうに対応されたそうです。

百村先生は留学生には全く興味がないとはっきりと言われました。当時、確かに留学生というのは国のエリートですよ。だから、エリートの人たちが日本に留学して、きっとお金も持っているだろうし、国に帰ったらまた指導的な立場をとるエリートなのだから、そんな人の手伝いは僕はしたくない。でも国際交流はしたい。そういう方々とか、国際交流を鳥取大学でなさってきた方々の齋藤先生、副井先生、若先生などがいらっしやいました。副井先生と齋藤先生は主に JICA で、ケニアにあるジョモ・ケニヤッタ大学というのをつくるときにいろいろと活躍された方で、ケニアからの留学生の受け入れなどに尽力されました。

また、齋藤先生は、鳥取大学に今、IFA、国際交流会という学生の交流サークルをつくられた方です。齋藤先生は、学生がそういうことをしないといけないと思ってつくったけれども、いまいちうまいかなかったとお話されていました。なかなか学生の興味が得られなくて、どうやってもう少し大きくしていけばいいのか、続けていけばいいのかと考えていらっしやる時期だったとお伺いしました。そういう一般の方々と大学人と一緒に何か連絡会をつくらうとしたのですが、全然うまいかなかったのです。

先ほど国際交流団体の御説明を少ししましたけれども、私個人的には、そういうことを当時は全然知りませんでした。今だからわかったことです。今考えてみますと、私たちが新しくつくった団体に本当にそういう連絡係なんかできるわけもなかったと思います。当時、ネットワークという概念もさほど強くはなかったのかなと思います。皆様それぞれの理由があつて、それぞれの国際交流をしていらっしやるわけで、別にほかの人と一緒に何かやりたいとか、もっと広げたいとか、そういうふうには思っただけじゃなかったと思います。だから会議を呼びかけたりいろいろやってみましたが、正直、全然うまいきませんでした。最初は、私たちは独自の行動をしたり、行事をする気持ちは全然なかったのですが、もう仕方がないから、では私たちがやりましょうかということ、いろいろやるようになってきたわけです。

タイムは、2つの目的があります。外国人のほうから見る、それから日本人のほうから見るという2つの目的があります。一般的に言われているように、留学生を助ける会では決してないのですが、一般的にそういうふうに言うとうわりやすいということです。現在は、全く状況が変わってあります。公的な支援もたくさん得られるようになりました。

タイムの活動は、セミナー、バザー、フェスティバル、パーティーなどがあります。日本語教室も最初はやっていましたが、今もうほかの方がやってくれるし、大学でも整いましたので、そういう必要がなくなってやめたという感じです。バザーは今でもやっております。2回ですが、これは新しく来られた方に、皆さんよく来てくださいました、私たちは皆さんにお会いできてうれしいですと、そういう気持ちを伝えたくてやっている行動です。いろいろ長い間やっていますので、国の紹介から、30分ぐらいのミニセミナーを運営委員会のときにやっております。また、いろいろな地球問題、平和と戦争の問題とか、ちょっと政治的な問題を扱うこともあります。人間の盾とか平和の運動、国際テーマ、それから世界のあれこれというものいろいろとやってきました。

また、私たちの特徴かなと思うのは、体験型のワークショップです。例えばワールドゲームは大きな地図をつかって、その上で実際に世界を体験しようというものですし、ハンガーバンケット、これは世界の飢餓の状況を体験するというので、来た人を3つのグループに分けて、豊かなグループ、貧しいグループ、中間のグループで実際に食事をしてもらいます。豊かな方はフルコースディナー、貧しい人は水だけ。そのグループの人数を実際の世界の飢餓というか、貧富の分配の割合に

合わせてやるというおもしろい体験ゲームで、こういうことはあまりほかの団体がされないので、いろいろと私たちができることかなと思います。

それから、何でもやりたいことをやるので、ベリーダンスをやったり、パーティーをやったりしております。学生を育てたいというか、いろんなことを経験していただきたいという思いがありますので、例えばグローバルフェスタという大きなイベントに学生を連れていったり、一緒にタイムフェスティバルをやったりしています。2015年は平和がテーマでしたので、平和のハト、また平和をテーマにいろんな人が集まって楽しく過ごしました。

これからの課題、チャレンジとしては、どこもそうですが、やはりスタッフが足りないというのがあります。ですが私たちの強いところは、その場その場で新しい人に入ってもらってやっているということです。私個人的には、私たちの会を継いでほしいとか、そういうふうには全然思っておりません。新しい方々は新しい会をつくられば良いことで、またそこから育てていけばいいと思っています。例えば公的な機関にはなかなかやりにくいこと、例えば時事的なことなどはやりにくいことがあると思います。ですので、私たちタイムがやりたい、何か皆さんが興味のあることを少しずつやっていきたい、そういう気持ちで過ごしております。時間の関係で、終わりのほうを急ぎましたが、どうもありがとうございました。

【第4報告】

「隠岐島前高校における教育魅力化の取り組みと海士町のグローバル戦略」 豊田庄吾（公営塾 隠岐國学習センター）

島根県の海士町から参りました豊田と申します。今から6年前に東京から海士町に移住しました。大学を卒業してまず入った会社では、東京とか大阪、福岡でばりばり働いていました。その後、企業研修をやっている人材育成会社に転職して、全国の小学校、中学校、高校を回りながら出前授業の講師をしたり比較的大きな会社の研修講師をしていました。ビジネスゲームやボーイゲームなどをやりながら、大人になったらどんな力が必要なのかという授業をさせていただきながら全国を回っていました。鳥取県でも倉吉市でお世話になりました。



6年前に岩本悠という男と出会い、2回目の来島の夜に隠岐牛と岩牡蠣を食べながら、気がついたら「移住します」と言ってしまっていたのですが、今から思えば本当に移住してよかったなと思っています。

島に移住してからは、自分自身の問題意識がちょっとずつ変わってきています。今までは学力を上げる教育だけではなくて、社会に出てから必要になる力をどう醸成していくのかを考えていたの

ですが、島に移住するとメディアに頻繁に取り上げられるようになった海士町でさえ人口がすごく減っている。私が移住した6年前は2,500人をちょっと切ったぐらいでしたが、今はもう2,300人台まで減っています。人口が減るなか、やはり地域にどのように貢献していくのかや、地域の担い手をどのように育成していくのかという方も大事だなと、少しずつ思いが変わってきました。

今、地方創生が叫ばれていますが、成功事例として挙げられているところは、短いスパンで効果が見えるような地方創生ではないかと思えます。例えば、上勝町の「いろどり」さんですとか、神山町でのIT企業の誘致ですとか、こういったところはどちらかというところ、短期的なスパンでうまくいっています。一方、そういうこともやりながら、中・長期的に効果があらわれるようなまちづくりとか地方創生というのも大事ではないか。いろどりだったり、神山のサテライトオフィスみたいな仕掛ができる人をどう育てていくのかということです。冒頭で山本さんがいろんなお話をされましたけれども、まさにこういう人を地域が育てていかなければいけないのではないかということです。地方にどんなふう金を持ってこようかとか人を集めてこようかということも大事ですが、それに加えて、地域で自立できる人、自立した地域をつくれる人をどう育てるかということとの合わせわが大事ではないかと思っています。人口が減少するということに対してどういう人づくりをしなければいけないのか、教育の中身をもう一回問い直して、それを公教育と地域のどちらが担うのかはわからないですが、答えを見つけられるようなことをやらなければいけないのではないかなと思うようになってきました。

では島前地域や海士町では、実際に何をやっているのかというお話をさせていただきます。

海士町を含めた3つの島を合わせて島前と呼びます。海士町の港のすぐ近くに島前高校という高校があります。島前高校の入学者はすごいスピードで減少しましたが、なぜ入学者が減ったかといえば、まずは人口減少です。都市部と比べると、離島、中山間地域、過疎地域と言われているところは圧倒的なスピードで人口減少が起こります。それに加えて教育環境への不安があります。島の高校に進学しても教育的によくはないのではないかという不安です。当時の島前高校では、とてもではないですが鳥取大学に進学できませんでした。1学年30人、40人しかいないのですけれども、その中で国立大学に行ける生徒は、ゼロの年もあれば1名の年もあるという状況です。島根県内のランキングで下から2番目でした。今では考えられないですが、部室が燃えたり、島前高の近くにとめてあった車が海に沈んだり、と悪さをするやんちゃな生徒がいたりしました。

そんな状態では当然、島外から生徒が来るはずもなく、56人定員の寮に島外からの生徒は4人くらいで、年間の赤字は800万という厳しい環境でした。お世辞にも教育的におススメできないような高校でしたがそれを隠しつつ、「これからすごくよくなります、是非来てください」と全国を回って呼びかけましたが結果はゼロ、誰も来てくれませんでした。そういう不遇の時代に何で移住したのだろうと問い直すこともありましたが、発送を逆転させてPR方法を少しずつ変えていきました。確かに汚くて臭くてぼろい感じですけども、高校だけを学校として捉えるのではなく、「島全体」を「学校」として捉えようということです。海士町の年間の行政視察は2千人を超えています。全国から多数の人が学びに来るような島で頑張っている人、挑戦している人を全て「先生」と位置づけるとおもしろいのではないか。島に多様な職業はないですけども、足りない部分はICT等を活用してグローバルに学ぶとおもしろいのではないかということです。まちづくりにはいろんな要素がありますが、僕は島に行ってすごくありがたいと思っているのは、1つの分野を担当している人の名前が言えるし、そういう方々がどういう思いで仕事をされているのかわかるということです。具体の人、具体の土地がある場所で学ぶことが大事ではないかと思うのです。

高校生に何のために勉強しているかを聞くと、大体は大学に行くためといいます。それはわかるけれども、大学に行って何が待っているの？大学に入る向こう側に何があるの？楽しいキャンパスライフの向こう側に何があるの？と問うと、「そこまでは先生に何も言われてないので、とりあえず僕は大学に行きたいと思います」といいます。何のために勉強するかは人によって多分違うと思いますが、最終的にはみんな社会に出て仕事をするようになると思います。仕事をして会社とか世の中に貢献できるようにとか、自立した人になるために勉強やトレーニングをしていると思いますが、だったら、社会に出て必要な力を学び、社会で活躍できる人間になるには、社会を一番体験できる場所で学ぶことが大事で、それがまさに島です。島はある意味、社会の縮図です。

島の高校生は都会を目指したがりです。東京に行きたいとか大阪に行きたい、何でも都会が最先端。でも、これに関しては都会ではなくて島のほうが最先端だろうという切り口があります。人口減少と少子高齢化です。鳥取も島根もこれに関しては日本の最先端に近いところを走っている。日本の誰も望んでないことを、我々が20年先駆けてここでチャレンジをしているのだと。島には人も物も金もない、でも、こういうところで挑戦をしてみないかということです。20年、30年したら日本がぶち当たる重要な課題を、20年、30年先駆けて体験できるし、そこでフィールドワークをしながら、自分にできることと自分がやりたいことをひもづけながらやってみないか。人、物、金はないけれども、思いを共有できる仲間と挑戦する機会は十分にある。島で一緒に挑戦しよう、



ということを東京の説明会で言うと、センスのいいお母さんから、うちの息子、うちの娘を島に行かせて鍛えたいという思いになられます。日本はずっと経済成長を目指し、物をたくさんつくって便利な社会を目指して頑張ってきました。でも、便利ではない世の中だった頃に便利なものはよかったです。相当便利になった世の中では、便利はむしろ依存を生み出してしまいます。一方、不便は知恵を生んだり、協力を生んだりしませんか、と言うと、お父さんよりもむしろお母さんから、「確かに不便はいい」という意見が出ます。島にはコンビニもスーパーもない、でも何かよさそうという感じでPRをしました。

では、島前高校でどういう教育、どのような人づくりを目指しているかという、「グローバル人材」として地域の未来を担うような人づくりをしたいと思っています。「グローバル」とは「グローバル」と「ローカル」の造語です。高度成長社会に大事だと言われていたのがグローバルセンスです。大量生産、大量消費とか、右肩上がりな経済成長の中で何が大事かという、やはり競争に勝つ力です。そのためには効率化して少しでも利益を出すことを追い求めていた。これはこれで今でも絶対に必要な要素だと思いますけれど、一方で、田舎のほうに今でも残っている持続可能な要素、例えば古きを生かし新しきにつなぐ「温故維新」とか「共創」、「協働」といった点をないがしろにしてきたのではないかと。こういった考え方＝ローカルセンスがこれからますます大事になってくるのではないかと。英語と日本語をどちらも操ることができるバイリンガルのように、都会の言語と田舎の言語、グローバルな言語とローカルな言語を使い分けられる人を育てることが、ローカルな文

脈だけではなくグローバルな文脈でも大事になってくるのではないかと考えています。

僕が尊敬している高校魅力化プロジェクトの担当課長がよく言うのは、グローバルな価値観は一番上に「経済」というキーワードがずしんと乗っかかっている。一番上に「経済」があるのは本質的ではない。「経済」が一番上にあっちゃだめなんだというのです。一番上にあるべきは「文化」だということです。「文化」をきちんと継承していくためには「経済」が大事だし、一方でローカルなセンスも大事だったりする。「経済」は「手段」であってそれが「目的」になってはだめなんだと言われて、すごく腑に落ちました。地域でも企業でも、大事にしている価値観をしっかりと次の世代に伝えていく。継いだ人がもっといい形にしようと思って努力する。そして、残したいものと変えなければいけないものをちゃんと考えながら活動することが大事だと思います。

そのような人材育成のために、島でどういう学びを用意しているのかというと、グローバルとローカルの2つのフィールドを用意しています。ローカルに関しては、まさに鳥取大学の地域学部と同様にどんどん地域に出て行き、地域の課題を見つけてそれを解決するような学びを取り入れています。一方、グローバルに関しては、交流に力を入れています。たくさん交流をすることで刺激を受けることが大切だと考えています。ローカルに関しては、1次産業が当然大事です。田植え、稲刈りもそうですし、漁業体験もそうです。いろんな現場体験をしながら、地域の人から知恵を学びます。チームで地域に出て行くこともありますし、観光プランを提案するという場合もあります。グローバルに関しては、例えば大阪にいるアメリカの総領事に島に来ていただいたり、オーストラリア大使に来ていただいて、グローバルな知恵を学ぶということをやっています。

生徒たちがチームで地域にどんどん出ていって、地域の課題を探しにいくという「地域学」という授業があります。地域の課題を見つけてそれをどう解決できるのかを自分たちで考えながら、アイデアを地域の方に発表することを毎年やっているのですが、去年からそのアイデアを全部英語に直し、シンガポールに行き、シンガポール大学の学生に向けて英語でプレゼンさせます。ちょうど先々週に生徒が行ってきました。プレゼンのVTRを見せてもらいましたが、本当に挑戦していました。自分たちが一生懸命考えたアイデアをどうにか英語で伝えようとするのです。去年は英語でプレゼンするところまではできたのですが、大学生からの英語での質問に全く歯が立ちませんでした。それを先輩たちがリベンジとして引き継ぎ、トレーニングを積んで現地の学生と交流するというチャレンジをしてきました。自分と違う環境にどんどん飛び込むことで、今までの自分が生まれ育った環境とは全く異なる視野や視点を得ることができます。世界で何が起きているのかをひとつひとつ紐解くと、食糧問題やシリア等々の移民問題、医療の問題、スペイン等々での雇用問題等がありますが、これらをよくよく考えると、全部島の課題とつながっています。食糧問題は少し置きかえると1次産業の課題です、島にとっての移民問題はまさにIターンと地元の人とがどうしたらうまくやって行けるかという問題です。地域医療の問題もそうですし、雇用の問題もそうです。地域と世界の課題はそれぞれが別モノではなく、つながっているのだということを考えさせるような学びの場をつくっています。

僕は、移住したぐらいから吉田松陰先生が大好きになりました。先日、松下村塾に行ったときにおもしろいことが書いてありました。何かというと、最初にまず村人たれというのです。挨拶をするとか、農業を学ぶとか、身近なところから学んでいって、実は、それは日本全体の国の課題につながっているのだと学ぶのです。身近な課題から学んで、それをストレッチして、国の課題もしくは世界の課題につなげるような教えがあったのを見て、自分たちと一緒にだてと勇気づけられました。僕は今、島の高校生が通う公営塾で働いています。その公営塾をリフォームした際、松下村塾をモチ

ーフにした部屋をつくりました。この塾では、単に英語とか数学とか、教科の勉強をするだけではなくて、これまでお話してきたような、地域の担い手を育成するために必要な学びが何か、そのためにはどんな場が必要かを考えています。全く塾っぽくないと思うのですが、築100年の古民家を改修して、継承することが大事だということを肌で感じられる学びの場をつくっています。古民家の中に土間のような1本道をぶち抜いているのですが、このドアを一年中開けっ放しにしています。いつでも地域の方に来てくださいとオープンにすることで、地域総がかりで将来の担い手を育成する学びの場をつくっています。

塾では「夢ゼミ」という大学でやるゼミ形式の授業を取り入れています。いろんな生徒たちが多様な大人とかかわりながら、将来自分がやりたいことを学んでいます。農業の回であれば農家さん、農協の人、行政の農業担当者に来ていただいて、島の農業は今どれぐらい厳しいのか話していただくなど、現状をリアルに学びます。身近な課題を学ところから、社会と自分はつながっているという感覚を体験させるようにしています。こちらの生徒は、海士町の2つ隣にある知夫村から船で通っていた子です。祖父が島根県で1等賞をとるような牛を飼っている畜産農家の孫です。ゼミ形式の授業で、高校2年の後半ぐらいから、祖父を継いで畜産農家になることが自分の夢だと言いはじめました。そこで島の畜産の課題は何かと聞いたら、農協が諸悪の根源なのでJAを壊したいというようなことを言いました。祖父が毎日そう言っているからということだったので、それは少し違うのではないかと、JAの活動について話を進めました。例えば柚子ポン酢で有名な高知県馬路村のJAの方とスカイプでつなげて1時間ほど話をしました。どうだったと聞くと、「いや、豊田先生、世の中にはいいJAの人もいますよね、すごく勉強になりました。あの方を呼んでJAの意識改革をしたいです」と言っていました。

彼は英語も数学も赤点です。余り大きい声では言えないですが、国公立なんかどこも受からないほど学力も低い。とにかく牛のことを勉強すればいいのですみたいなことを言っていた生徒です。彼は学力は低いけれども、考える力はしっかりしていて、特に牛に関してはどんな大人がどんな質問をしても必ず答えます。地域の人と話をして褒められて、だんだんだんだん調子に乗って、「慶應大学を受けてもいいですか」と言いました。「いいよ」と言うと、彼はどんどんと真剣に勉強しました。そして奇跡的に慶應大学に受かりました。彼は今、湘南藤沢キャンパスに牛小屋を建てるのが夢だと言いながら、牛の肉質を調べる機器の研究をしたり、畜産と何かを掛け合わせて儲かる畜産のあり方について研究しています。

もう一人の彼は、海士生まれ海士育ちです。岩牡蠣「春香」を生産している会社の社長さんの息子ですが、将来30歳になったら海士町の町長になりたいと言っています。山内町長はすごく頑張ってるし役場の職員もみんな頑張っているけれども、あの人たちはいつか死ぬ。死んだら持続可能ではないので、自分は今の海士町の挑戦を持続可能にするために、次の挑戦者、継承者になりたいと言っているのです。だからもっともっと勉強するというので、早稲田大学に通っています。早稲田大学に入学した年から、東京中の大学を駆けずり回ってプレゼンをして、出前授業をするために30人の学生を集めて島に連れてきました。大学在学中に6回ほど企画を実施して、今では後輩に引き継いでいます。このようにどんどんチャレンジする人間が育っています。

山本さんのお話の中でも「郷土愛」が話題になっていましたが、「郷土愛」を醸成する仕掛けとか要素は何かというと、やっぱりローカルな地域での自然体験とか地域の人とのかかわり、松原先生がジオストーリーみたいこともおっしゃっていましたが、そういう地域のストーリーとたくさん触れることだと思います。ローカル・アタッチメントではないですが、たくさんの体験をした

り触れ合うことで、一体感とか、自分が何とかしなければいけないという素地ができると思います。個人的に大事だなと思うのは、大人が余り見せてこなかった地域の厳しい現実と対峙させることで、少しずつかもしれないけれども、自分のこととして地域のことを考える「当事者意識」が醸成されるのではないかと思います。一方で、グローバルに交流を促進することで、今までは自分らしさがわかっていなかったのが、相手の目線や比較によって自分らしさがわかります。あるいは一度外に出ることで自分のふるさとにどんな良さがあるかということもわかって、地域に対する誇りが生まれるのではないかと思います。それを今、学びの場でこつこつやることで、そのような人づくりができていないのではないかと思います。

平成20年の最悪だったところから反転して、今は島外からたくさん生徒が来るようになっていきます。そんな中で教育移住も起こるようになってきました。外から生徒が来過ぎると、地域の学校でなくなってしまうので、定員の3割だけを県外枠で設けています。そうすると県内の子、島の子の枠は余裕があるので楽勝で入れます。県外枠はもう年間100人とか200人くらいお断りするぐらいまでになっています。そのため今何が起きているかという、神奈川県のあるお母さんが、息子が中2の時に一緒に海士町に移住してきて、海士町枠で受験をするという、受験のための移住が起こり出しています。京都の有名な半導体メーカーで働いていたお父さんが、娘が島前高校を受けるタイミングで企業を退職して一緒に移住され、島で廃れつつあったミカン農家を助ける仕事をされています。そんなふうには、少しずつ教育という切り口で、まちづくりができないかと思えます。教育もそうですが、右肩上がりの経済成長を狙っていた時期は何でもかんでも画一化された基準でやってきました。東京に追いつけない地域はやっぱり教育にも格差が生まれていました。そんな中で今まで地方がやっていた教育は、都会の担い手を育成するような教育、地域を出ていくための教育だったのではないかと思います。そしてその狙い通りに若者は外に出て行って、狙い通りに過疎が進んだわけです。そうではなくて、地域には地域の魅力があるということをちゃんとわかった上で、その魅力を活かした教育を行い、地域の未来を担う人づくりを行うと、このような教育移住が生まれます。ものづくりに加えて教育という切り口での地域のブランド化みたいなこともできるのではないかと思います。時間はかかると思いますが、若者の減り幅が少なくなったり下げどまったりして、地域の魅力化が地域の持続可能性を高めることにつながればと思っています。

10という数字と1万という数字は、明らかに1万が大きいです。今まで人口が少なかった地域とか従業員が少なかった会社等、何でもかんでも小さいことは悪いことだということがあったかもしれない。ただ、10分の1と1万分の1という数を比べると10分の1のほうが大きい。これは何かというと、10分の1つまり10人の中の1人の役割や責任は、1万人の中の1人より大きいわけです。これは違う言葉でいうと、自分がどれだけ未来に貢献できるかということで、10人のうちの1人が一生懸命頑張ることは、1万人の中で頑張るより未来に対して貢献できる確率が高いのです。特に鳥取や島根のような人口が少ない地域で教育をする、まちづくりをする、いろんな挑戦をするということは、地域の未来とか会社の未来とかコミュニティの未来に自分の頑張りがつながればと思います。

「ふるさと」という、ちょうど101年前にできた歌がありますが、「ウサギ追いしかの山」という歌の3番に、「志を果たしていつの日か帰らん」という歌詞があります。これは東京に出て頑張って一旗上げて、余生を過ごすのがふるさとだという価値観だったと思いますけれども、まさに山本さんのように、リタイアする前に自分の志を持ってふるさとに帰ってくるような人づくりを、いろんなところでやっていけたらいいなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

総合討論 (要約：仲野誠)

4人それぞれのプレゼンテーションを聴いた後に、研究会の締めくくりとして総合討論を実施した。以下、その論点を記したい。

4.1 山本敬さん

バルコスには人、物、金というのではない。人、物、金がないと、昔はまずは人をそろえてお金をためて物をつくっていかねばいけなかったのだが、基本的に今、例えば20年前と比べて、圧倒的に違うのは、アウトプットというのがすごく楽になったことである。

僕も実は20数年前に、隠岐の島に物を売りに行った。ハンドバッグを行商で売りに行っていた。実際、インターネットが普及する前は、本当に物を抱えて持って行って売るとい手法しかなかったわけで、それをやっていたのだが、今、みなさんに見ていただいた動画はうちのプロモーションビデオなのだが、実はニューヨークの学生さんにつくってもらった。毎シーズンつくってもらって、実はこれをユーチューブに流しただけ。これをユーチューブに流しただけで、各国のディストリビューターというか、ファッション関係者から問い合わせが入ってくるわけで、実際に現物を持っていかなくていい。僕の今の取引先のほとんどは、お会いしたこともない方々ばかりである。昔といってもつい20年です。やっぱりインターネットがあるかないかで大きく変わっていると思うが、そこはインターネットがないおかげで、イメージとしては20年ぐらい遠回りしたような感じがしている。

まずこの商売を始めたころは、百貨店と商売するのにすごく大きい会社でないといけないとか、立派な登記簿謄本でないといけないとか、いろんなことがあった。しかし今は完全にそういうことがなくなって、明らかにアウトプットが楽になった。もうインターネットですつといける。こういうことは、僕が商売を始めた時代にはまったくあり得なかったので、今後の若い方にはこの点はやっぱりよく理解してやってほしい。つまりアウトプットがすごく楽になっているということ。みんなが楽になっているので、一概に誰かだけが優位になるということはないと思う。しかし、少なくとも、倉吉から発信するという点に関して、それが対世界ということになると、あまり東京から発信するアドバンテージというのはどんどんやっぱりなくなってきているという気はすごくする。そのことを一度理解していただくために、さっきの動画を見ていただいたところである。

4.2 松原典孝さん

皆様の話を聞かせていただいて、はっと今さらながら気づいたこともあった。山本さんが最初に言われたように郷土愛はとても重要だと思っていて、ジオパークでもそれをかなり押ししている。その中で、地域の子供たちには、いかにこの地域がすばらしいかということを中心に教えていて、豊田さんがおっしゃったような厳しい現実というのはあえて言わない。ジオパークでもこんなにすばらしいのだから、君たちは恵まれているのだよ、いいのだよということばかり言っている。でも、実際子供たちは多分、地域の現実はある程度理解していて、ジオパークというものをやっている中で、やっぱり現実が見えてくる。

私は、豊岡高校という豊岡にある県立高校の海外研修で、レスボスジオパークというところに研修に行き、向こうの高校生と交流するのだが、やっぱり向こうのジオパークもジオパークの教育をやっていく中で課題を持っている。レスボス島は、今シリアから難民がいっぱい来ているところで、すごく大変なところなのだ、結構貧しく苦しんでいる。その中で交流すると、地域課題として同じような悩みをもっているのが結構話が合う。今考えると、僕は教えてなかったのですが、生徒たちは勝手に地域課題を考えていたのだなと思った。

今、アウトプットの話があった。今、SNSがあるが、アウトプットのすごいところは、そこで共有した生徒たちが、フェイスブックで友達になっているということ。今でもレスボスの高校生と豊高生と普通に英語でこんなアニメを見たよとか、そんな話をしている。まだ地域課題についての議論まではしていないが、国際交流というのが地域課題というキーワードで、案外うまくいくのではないかと思っている。

4.3 ケイツ佳寿子さん

私は、ネットワークについてお話をしたいと思う。

さっきの発表でも言ったが、私たちが最初にやりたかったのはネットワークづくりだった。最初はそれがうまくいかなかったということで、私たちが独自のことをするようになった。27年、28年も活動していると、どこの組織も同じような状況になるが、メンバーたちが高齢化したり、新しい人材が入らなかつたりしてとても困っているところが多い。ここでこそ、ネットワークが必要ではないかと思う。

例えばタイムフェスティバルに関しては、私たちがずっと担ってきていて、規模はどんどん大きくなってきた。フェスティバルの実行委員会というものはなくてタイムだけがやっていたのだが、それを担うのがとても大変になってきて、次第に国際交流財団さんが、主催団体の一つとして入ってくださるようになり、実行委員形式にした。最初はいろいろな国際交流団体に声をかけたのですが、それもあまりうまくいかなかった。結局どうしたかということ、個人を一本釣りするように声をかけたら、これがちょっとうまくいった。今の人たちは割合個人でも動くようになったということなのか。個人でもネットワークに入るようになったのかなと感じている。

また、私たちのふだんのタイムの活動でも、大学の国際交流会IFAにも入ってもらって一緒に活動している。そうすると、私たちが若い人のことを学べる。若い人には若い人たちなりのやり方もある。一方で、学生さんたちも私たちのやり方を見たり、また私たちのほうがもうちょっとお金を持っているので、金銭的に援助できるときもある。そういうふうにとどんどん人はかわっていくのだが、いろんな人とアメーバ的につながっていくことによって活動が続けていけるのかなと感じているところだ。

4.4 豊田庄吾さん

お三方の話を聞いて、すごく勉強になった。自分の話についての補足はないのだが、お話を伺いながら考えたことは、一つはケイツさんがおっしゃった、「つながる」ということがキーワードかなと思った。僕らは継承の話もしているが、つながりには縦につながるものと横につながるものがある。横というのは今現在、わからない。大学と地域をつなげるとか、地域と学校をつなげるといって、人と人とをどうつなげるかという課題で、それに関しては多分うまくつなげられる人というコーディネーター的な組織とか人が必要なのだろうと思う。その人は多分、恐らくどっちの言語も

わかるという、「通訳」ができる人なのだろうなと感じた。

もう一方、山本さんに伺ったヨーロッパの職人さんの話とか、松原先生がおっしゃったジオパークの話で、もうちょっと歴史みたいな、もっと長い時間軸でずっとつながってきているというか、つなげていくとか、継いでいくとかということを考えて。多分どっちも大事だろう。そういうことを感じたというのがまず1つのポイント。

そして、つなげるとかつながるということに関し、特に横につなげるというのは、多分手段の話なので、何のためにつなげていくのかという目的とか、何を大事にするのかとか、どうしたいかとかがすごく大事ななと思った。話を聞いて、キーワードは多分2つかなと思った。まず1つは仲野先生がおっしゃっていたように価値観が変わってきたということだろう。お金とか経済だけを一つの基準とするような価値基準から、もう少し違った価値基準も必要になってきた、世の中が変わってきたのだなという感覚。

もう1つは、大学生とか新人研修をやっている感覚と近いのですが、いかに自分事感をもってつながっているのか、自分たちが当事者だという感覚をいかにつくっていくのかという課題。これに関してはジオパークもそうだと思いますが、それはジオパークに熱い関心をもっている人たちの話ということではない。会社もそうだと思うが、社長がやっているだけでしょということではなく、もう少し一体感というか、自分事感とか、私たちごと感みたいな当事者意識をどうつくっていくかということが、やっぱり大事ななと思った。

4.5 仲野誠

先ほど、私がキーワードとして気づいたこととして挙げた、「発層の転換」とか「頭をバージョンアップしていく」ということに、確かに「参加する」とか「担い手になる」ということ、つまり人ごとでないという意識も確かに含まれる。あと「当事者意識」が大事だろう。

では、それを実際にどう生むのかということになると思うが、その辺はとても大事だなと確かに思った。あるいは、発想の転換のひとつのバージョンとして、歴史に教えてもらうということ、それもローカルな文化、ローカルな歴史というような歴史が教えてくれるという点も大切なことだろう。歴史に教えてもらうという学び、そして、それを通訳することと、どうやって人々に伝えるかとか、そういう点が確かに興味深いと思った。

5 パネリスト4名からのメッセージ

最後に、4名のパネリストから一言ずつきょうのディスカッションを振り返ってコメントやフロアで聴いていた学生たちへのメッセージを伺った。(以下、メッセージの意味合いが強い発言なので、語りのニュアンスをできるだけ損なわないように、ですます調で載せている。)

5.1 山本敬さん

今日はありがとうございました。表題が地域再生の手法という形だったのですが、基本的には地域再生の近道は多分ないと強く思っていて、それをゆっくり各人それぞれの立場でできればと思います。僕と皆さんとは立場も違うし、僕は経済の中でやっていこうと思っています。

僕はやっぱり鳥取県が好きですし、そこの中で自分なりの態度で何か示していきたいと思っています。死ぬまでにやりたいと思っているのは、自分の今まで培ってきた財産をある程度使って、鳥取県にいたらすぐに全国区に行けるというようなプラットフォームがくれたらいいなということ

す。まず、今年12月に鳥取県のカニと牛を売る予定なのですが、そういうことをチャレンジしていきたいと思っております。ただ、近道はないのではないかと、本当に思っております。以上です。

5.2 松原典孝さん

私はどちらかというと、今回登壇されている皆様と違ってチャレンジする人というよりは、チャレンジする人を支える人というか、縁の下の力持ち的な裏方の立場で活動しています。きょう皆さんの元気なチャレンジを聞いて、とても私も元気が出ました。学生さんたちも日々研究とかいろいろ忙しいと思いますけれども、ぜひ何かチャレンジしてその学んだ成果や、気づきを外にどんどん発信していただきたいと思います。

例えば、アウトプットの課題も話題に出ましたが、SNSとかで私たちはいろんなところにつながっていますし、そういったもので失敗を恐れずに、どんどんどんどん発信してください。時には炎上してしまうこともあります。そうすると、例えば私みたいな縁の下の力持ちの方もそういうのを頑張ってピックアップしていきます。そうすることによってこの地域全体を盛り上げていきたいと思っておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

5.3 ケイツ佳寿子さん

私は鳥取に来て、本当によかったと思っています。その理由はいろいろあるのですが、先ほど豊田さんも言われましたが、人数が少ないということはそれだけ責任が大きいとおっしゃいましたが、チャンスも大きいと思います。私はここに来てタイムを初めとして、4つか5つぐらいの新しい団体とかグループを立ち上げたと思います。もちろん私が1人でやったことでは決していないのですが、もし東京に住んでいたら、多分そんなことはしなかったのだらうと思います。いろいろな団体があるし、自分のいろいろなところに目が行ってしまいます。

鳥取で新しく何かをやると思ったのは多分鳥取になかったから、鳥取でこれが必要だと思われたからやったことです。ですから、皆さんも、小さい町には小さい町なりのチャンスが大きいということを忘れずに、いろんなことをチャレンジしていただきたいと思います。

5.4 豊田庄吾さん

今回のテーマである「地域課題と知のクロス 地域再生の手法ー地域と世界をつないでー」ということですが、地域と世界がつながることで何が起きるかということ、もうさんざん皆さんおっしゃったとおりですが、やっぱり世界が広がるとか可能性が広がる選択肢が広がることだと思います。それと価値観が変わるとか、いろんな今までのルールが変わるといったときに、やっぱりビジネスもそうですし、学びもそうだと思うのですが、今までだったら小さいまま、少ないリソースのままですることができる可能性が狭かったのが、すごくいろんなことができるようになってきていると。

だから、やっぱりつながることはいいことだと思うのですが、そうしたときにつながった後に、でも何が大事かということ、何を大事にするかとか、どうありたいかが僕はすごく大事だと思っています。この時、僕は本当に大事だと思うのはやっぱり大人が変わることだと思っています。大人がずっとこの地域だめだよとか、こんな地域にいてもしょうがないとか、この地域の未来はないと言っている地域に帰ってきたい子供なんか全然ないと思っています。やり方はいろんなやり方があるのであれですが、結構大人が変わっていないのではないかなど。大人の口癖とか、やっぱり環境が人をつくると思うので、本当に山本さんは、山本さんの家とかそういう環境があって、多分チャ

レンジするとか好奇心な人になったと思うのです。だから、そういう環境を大人がつくるのか、子供たちが自分でつくるかはありますが、やっぱり環境をつくっていくということが大事かなと思います。

最後に1個だけ、学生の方々とはとにかく動く、とにかくやっぱり挑戦する。10代、20代の失敗なんて失敗ではないと思っているので、やっぱりどんどん動いて自分が鳥取大学を有名にするとか、自分が鳥取大学の地域学部の価値を上げるとか、それぐらいの思いで頑張ってもらいたいと思います。以上です。

6 ディスカッションの総括 (仲野誠)

きょうは、地域再生の手法というテーマでやってまいりました。山本さんもおっしゃいましたけれども地域再生には近道はないということや、マニュアル化できないことが明らかになったように思います。ただ、ここにいらっしゃる方々が現場で格闘されている様子が、まさに鏡になって、豊田さんもおっしゃいましたけれども、自分が地域をどう生きているかと問われているような時間だったと思います。

自分が何を守っていかなくやならないか、あるいはどこをバージョンアップしていかなくやならないかということ丁寧、丁寧に考えるということです。それは、一方には自分を取り囲む地域や世界を変えるというベクトルもあるかと思えますし、もう一方で、世界に自分たちが変えられないように踏ん張るという覚悟も必要であるように思えます。この時代性も大きくつかみながら、一方では地域ごとの固有の歴史や文脈も理解して、一般的な答えがない課題を志を共にする仲間たちを増やししながら、手探りでやっていくということだろうと思えます。

総括

法橋 誠

(鳥取大学地域連携担当理事・副学長)

本当にあっという間の時間が過ぎてしまいまして、最後になりました。総括という、非常に何か難しい仕事を仰せつかってちょっと後悔しております。これも常日ごろ地域学部、藤井学部長のところに厳しいことを言っている、そういうことでこういう厳しいお役目を仰せつかったのかなということで、若干後悔しております。

ただ、参加させていただいて皆さんの実践を伺って、非常に感銘を受けました。総括ということにはならないと思います。ちょっと感じたのが、やはり共通して言えるのが、やはり時代が大きく変わってきたのだなということです。経済を超える価値ということが本当に課題になってきた時代かなと思います。我々、戦後生まれの人がほとんどかなと思います。戦後の高度経済成長、右肩上がりという言葉も出てまいりましたけれども、右肩上がりの時代に成長した世代だと思っています。そういった意味では、仲野先生の第1近代人ということになるかと思えます。おそらく、私なんかはばりばりの第1近代人で、学生時代に第1次オイルショックがあって、そのために随分就職には苦労しました。仕方なしと言ったら申しわけないですが、県庁に入ったということでした。それで県庁で30数年仕事をしてきましたけれども、どうしてもやっぱりお金なのです。貨幣とい

うものの価値を超えるものがなかなか見出せないということだったろうと思います。

ところが、考えてみると本当にこの貨幣というのも非常に危ういものというか、ある意味では、みんなの幻想の上に成り立っているということだろうと思います。恐らくドルとか円とかというものをみんなが信じなくなったら、単なる紙切れになる。そういう時代がこれから訪れないとも限らない。そういった非常に危うい基盤の上で我々は何となくそういったものをありがたがってこれまで暮らしてきたのだらうと思っています。そういった意味からは、きょう登壇いただいた皆さんは、そういったものを超える価値というものを探し求めて、ある意味ではいろんなチャレンジをしてくられている。ただ今、進行形でされている方々ばかりなのではないかと思えます。山本さんそうではない、自分は経済だとおっしゃるかもしれませんが、ファッションの付加価値というものは、恐らく貨幣の価値とはまた違った、豊田さんから文化の話も出ましたけれども、そういったものを体現した世界なのではないかと思えます。

オイルショックを経験して、日本の中でもこれからは高度経済成長が終わって、物の豊かさから心の豊かさだということが、もうその当時から言われていました。ところがそう言いながらもみんななお金のことばかり考えているという時代があって、非常にうさん臭さを感じてきたということです。ただ、だんだんだんだん成熟した社会になって、恐らく第2近代人というものがどんどん誕生してきて、そういったことが本当の意味を持った、内実を持ったスローガンになりつつあるのかなということをお話の聞きながら感じてたところです。

それで、この世の中、地域というものを変えていく、あるいは本当に豊かにしていく、そういった人づくり、人材づくりというものがこれから必要だということが、きょうの共通のテーマだったのかもしれませんが。そういったことを担う人たちというのはどういう人か？最初に、仲野先生が言われた第2近代人というところにその答えがあるのかなと思っています。今日来ている若い人たちは、話の中でも出ましたけれども、我々第1近代人とは違った感性なり、いろんな価値観なりを持った第2近代人の先駆けなのではないかなと思っています。そういった人たちが、本当に地域の価値というものを見出す、そういうことによってこれから地域社会というのがどんどん変わってくるのかなと思ったところです。

今日の皆さんに共通して言えるのは、そういった価値ですとか、それから課題といいますか、何をしなければいけないのかというミッションといいますか、そういったものを見出す力であるとか、それを実現するために踏み出す力、勇気、そのためにいろいろな人と人をつないでいく情報も含めて、そういったことをつないでいく力を持った方々ばかりだったのだらうなと思います。そういった力というのは、我々にとってもやっぱり非常に必要な力なのだらうと思います。若い人たちは、これからそういったことをみずから学んで、本当に地域を担う人材になっていただければなと思っています。

実は、豊田先生にはきのう夕方、竹川先生のゼミのほうで、夢ゼミをやっていただきまして、そのときにフルバージョンの講演をお聞かせいただきまして、非常にきのうも興奮したところです。ぜひ、こういう話を地域の本当の教育の現場につなげて、地域の今の教育というものを革新していく必要があるのではないかと考えていますが、残念ながら、今日は教育委員会の方は来られていないかなと思っています。本当はもっとこういったセッションが、そういった方々に聞いていただいて、実際の教育の現場というものを変えていく力になっていくことが必要だらうと思います。そういったことを、我々が教育に携わる人たちに伝えていくことが必要なのだらうと思います。

最後に、地域学部にとちょっと憎まれ口を言うと、やはりこういった取り組みは全学的に、地域学

部だけではない、鳥取大学の教員であれ、学生であれ、それから職員であれ、皆さんに聞いていただきたい話ばかりでした。そういったところが全学的に広がっていないというのは、やっぱり問題というよりも残念なところですね。こういう話をしながら、学内で、大学の先生自体が学内のうちのネットワークづくりというものが、案外下手くそなのではないかなという感じがいたします。もっと、学内で本当にみんなとつながるということを実践していくことがこれから非常に大事なのではないかなと思った次第で、これは余分な憎まれ口でありましたけれども…。

本当にきょうは山本さん、それから松原さん、ケイツさん、豊田さん、本当にありがとうございました。本当にすばらしいお話をいただきまして、それを的確にまとめていただいた仲野先生にもお礼を申し上げて、私の総括にさせていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

(資料1) 地域学研究会第6回大会プログラム

地域課題と知のクロス 地域再生の手法—地域と世界をつないで—

- 9:30 受付開始
- 10:00 開会あいさつ
- 10:30 パネルディスカッション説明
- 11:00 パネル発表1
- 11:30 パネル発表2
- 12:00 昼食
- ポスターセッション
- 13:30 パネル発表3
- 14:00 パネル発表4
- 14:30 休憩
- 14:45 総合討論・質疑応答
- 15:45 総括・閉会あいさつ
- 16:00 閉会

鳥取大学地域学部は、地域の公共的課題の解決に向けた教育研究の展開、地域課題に取り組むキーパーソンの養成を目的として、2004年にスタートしました。そして最近の地方創生の動きの中で、地域が、今後の日本社会を支えるものとして、様々な面から大きく注目され始めています。

われわれが対象とする地域は、国内のローカルな視点からの地域だけではありません。地域の国際比較、海外との地域間交流など、地域をめぐるネットワークも、今後、持続可能な地域をつくっていく上で欠かせない重要な要素となります。地域学部の教育でも、海外フィールドワークなどを導入し、地域について広い視野を持つ人材を育てようと考えています。

そこで今年の地域学研究会第6回大会では、「地域課題と知のクロス 地域再生の手法 — 地域と世界をつないで—」というテーマを掲げ、地域の教育へのグローバル戦略、地域ベースの国際交流、地域課題解決に向けた国際比較、地域企業の国際戦略などの面から実績ある実践者や専門家を迎え、パネルディスカッションを展開したいと考えています。ここから、世界とつながることによる新たな地域創生のアイデアを得ることができることを期待します。

パネル発表

- 1 山本 敬 氏「人口減少時代に豊かな鳥取県をつくるために」
- 2 松原典孝氏「ヨーロッパにおけるジオパーク活動と山陰海岸ジオパークの取り組み」
- 3 ケイツ佳寿子氏「私たちの国際交流 - タイム27年の歩み」
- 4 豊田庄吾氏「隠岐島前高校における教育魅力化の取り組みと海士町のグローバル戦略」

*飲食コーナー 「トットリ式屋台」

*ポスターセッション 担当教員や地域連携研究員が様々な事業成果をポスターで紹介します。

(資料3) ポスターセッション

第6回地域学研究大会 ポスター発表 2015年11月28日(土)

掲示時間:9:30-15:00, コアタイム:12:30-13:20

共通教育棟2階:A20大講義室入口前スペース

上段:発表タイトル、下段:発表者

A01	アジア青年会議(Asian Youth Forum) - 鳥取から世界へ - ケイツ・キップ(地域文化学科)
A02	メキシコ海外実践教育プログラム 中 朋美、ケイツ・キップ(地域文化学科)
A03	海外フィールド演習「北米プログラム」 ケイツ・キップ、中 朋美、中尾 雅之(地域文化学科)
A04	東アジアプログラム」 柳 静我(地域文化学科)
A05	出雲市における外国にルーツを持つ子供たちの教育環境—学校と地域の取り組みに注目して— 小池 悠規、高山 可菜、吉田 航太、辺 帥、児島 明(地域教育学科)